

書 評

青山和佳. 『貧困の民族誌：フィリピン・ダバオ市のサマの生活』東京大学出版会, 2006 年, 414p.+xi.

玉置泰明\*

本書は、開発経済学者・青山和佳氏によるミンダナオ島ダバオ市のスラムに住む少数民族サマの民族誌である。本書の大半は書き下ろしだが、原型となったのは著者が 2002 年に東京大学大学院経済学研究科に提出した博士論文「ダバオ市におけるバジャウの都市経済適応過程—経済的生活水準とエスニック・アイデンティティの観点から」であり、同論文は 2003 年に「第 2 回井植記念アジア太平洋研究賞」を受賞している。

まず本書の概要を示す。「はじめに」では、本書の目的、方法論を規定する。本書はサマを事例として経済的貧困を人々の暮らしとの関連において捉える試みである。分析の鍵概念として開発経済学では看過されてきた「エスニック・アイデンティティ」を取り上げることで「開発経済学における一国的な思考の枠組みを省みる必要性を訴えたい」(p.2)、「もうひとつの意図は、貧困者を個別社会の価値観や文化を担った主体としてとらえることの必要性を訴えることだ」(p.5) という。貧困者を主体的存在として捉えた A・センの問題意識を念頭におきつつ、貧困の実態的理

解のため人類学に目を向け、エダーの「適応」概念を援用する。

第 I 部「現代サマの「貧困」：二重に周縁化された人びと」は、地域の歴史、社会的状況の中にサマを位置づける。第 1 章「誰が誰を「バジャウ」と呼んできたのか：他民族との関係、国家との関係について」では、サマの他称、自称としてのバジャウという概念が分析される。バジャウ＝漂海民というイメージが定着しているが、実態は多様化しており実体的定義は不可能である。著者は、他民族および国家との関係において歴史的に構築されたものとしてのバジャウ・アイデンティティを検討した。第 2 章「貧困層としてのバジャウ：ダバオ市のサマ I」では、バジャウと他の 4 民族が混住するスラムでの世帯悉皆調査の結果が示される。生活水準指標のすべてにおいてバジャウが社会、経済的に低い地位にあること、非バジャウがバジャウに対して蔑視的イメージをもつことが確認された。第 3 章「豊かなサマ、貧しいサマ：ダバオ市のサマ II」では、サマ内部の差異が示される。住民 20 人の社会的地位序列についての主観的評価の結果、社会的地位の高い順に、1) 男子：貝殻真珠販売業（於ホテル）、女子：主婦か非漁業、2) 男子：貝殻真珠販売業（於ホテル・行商）、女子：古着行商、3) 男子：貝殻真珠販売業（対貨物船・行商）、女子：主婦か古着行商、4) 男子：漁業（籠漁、延縄漁）、女子：古着行商、物乞い、5) 男子：漁業（突き漁）、女子：物乞い、という 5 つの生業グループが抽出された。

第 II 部「「貧困」を生きる：バジャウとし

\* 静岡県立大学国際関係学部

て、サマとして」では、5 グループから各 1 世帯をとりあげて生活実態を詳述する。第 4 章「サマがバジャウを名乗るとき」では、既存の漂海民研究からアイデンティティのモデルの適用妥当性を検討し、世帯を分析単位とする意味を論ずる。5 グループの比較の分析から、政治、経済的交換場面でのバジャウ・アイデンティティ、信仰場面でのサマ・アイデンティティの強調という概括を行なう。第 5 章「グワポの家族：商売と信仰と教育」では、社会的序列最上位グループの家族をとりあげる。サマの集住地区ではなく、他民族との混住地区に住む。真珠販売業で安定した収入を得、栄養、資産、教育などすべてで他のサマを引き離す。出自は陸サマだが、一族の他民族との婚姻が進んでいる。宗教、社会儀礼において一族の結集性が強い。他のバジャウと同一視されることを嫌うが、商売ではバジャウ・イメージを利用する。第 6 章「ピライアの家族：古着を売る母と娘たちの祈り」は第 2 グループの家族である。夫は無職（元漁師）で、妻と娘の古着行商で家計を支える。食事も日々の稼ぎに依存するが、勤勉で飢えることはない。グループ内でも助け合う。夫婦とも非識字で子どもたちもほとんど学校に行っていない。出自は陸サマでサマ・アイデンティティをもつが、援助にはバジャウとして応じる。第 7 章「パパ・メルシート

の家族：窮乏化と揺れる祖霊信仰」は、第 3 グループである。家船で暮らす海サマであった。その後も移動しながら漁を行なってきたが、ダバオでは生業がなく困窮化した。夫婦は月の半分ほど近隣都市で物乞いをする。子

や孫たちも何らかの仕事で家計に貢献するが、援助や店のつけ買いなしでは暮らしていない。教育もほとんど受けていない。グループ内で近年キリスト教化が進み、教会をとおして政府や NGO の援助を受けている。自称はつねにサマだが、物乞いなどで自虐的にバジャウを名乗る。第 8 章「カルマンの家族：神の加護を信じて海に生きる」は、第 4 グループである。代々の漁師だが、ダバオ移住後の漁の低迷で、妻たちが古着行商で家計に貢献する。収入は不十分で食事も不安定。一族でも、漁が不調だと老人や女、子どもが物乞いをする。一族全員非識字。伝統的宗教を中心としたグループの精神的サポートは強いが、他のグループとの経済的、社会、宗教的関係はほとんどない。政府など外部との関係も希薄で援助も受けない。サマ・アイデンティティをもつが、家船経験者と自らを区別する。バジャウを自称することもあるが戦略性はない。第 9 章「マグサハヤの家族：物乞いとして陸を漂泊する」は、最下位グループである。家船生活をしていた海サマで、男の多くは突き漁をしていたが、ダバオでは漁ができなくなり物乞いをしている。グループの誰でも、時に長期間物乞いや行商のため移動をする。全員非識字。食事は不安定で飢えることもある。グループの相互扶助は弱く、宗教的機能も弱体化した。政府、市場とのつながりは弱く他グループともほとんど経済的関係はないが、同じ海サマの第 3 グループには親近感をもつ。「弱者としてのバジャウ」を訴えることで生きている。第 10 章「クリスチャン・バジャウとして新しく生きる？」

は、近年のキリスト教受容を論じる。海サマの牧師が布教を始め、まず第3グループが受容し、第5グループを巻き込んでいった。牧師をとおして援助などの外部資源の導入がなされ、物質的恩恵やコミュニティの精神的機能の復活がみられた一方、格差の増大や牧師へのパワーの集中による他の信徒との確執もおこった。キリスト教受容の過程で自尊心を伴う新たなバジャウ・アイデンティティの覚醒がみられたが、政府や他民族との力関係に構造的変化をもたらすものではなかった。「おわりに」では、5グループのエスニック・アイデンティティの動態をまとめらうと、分析結果から得られる含意が述べられる。

本書はサマ（バジャウ）民族誌への重要な貢献である。多様な生活実態の記述をとおして、貧困とエスニック・アイデンティティの相互関連を実証するという著者の意図は十分達成されている。そもそも研究対象の選定からして、難しい挑戦であった。本書のサマはすでに伝統文化をほぼ失っているし、大規模災害や開発などエスニック・アイデンティティの覚醒に結びつくような劇的なできごとは何もない。「淡々と日常生活を送るなかで」（p.12）のエスニック・アイデンティティの動態を記述したことが民族誌としての普遍性を高めている。また、本書の事例は、固有文化の消失がエスニック・アイデンティティの喪失につながるという論への反証となっているし、従来の「漂海民の陸上り＝定着」という図式への反証（陸上り後も移動性を保持）として、漂海民の陸上適応の研究にも新たな貢献をなしたといえる。

本書の意義のひとつは、貧困状況への「適応」だけでなく「適応困難」も描いていることだろう。著者は、既存研究では「受動的な弱者としてのマイノリティを描く「進歩の犠牲者」モデルを暗に避けようとするあまりなのか、（中略）サマが変化の波に対して適応困難を経験する様子はあまり出てこない」（p.40）と指摘する。近年の人類学は本質主義的文化理解を批判するが、犠牲者モデル（消滅の語り）を避けて主体的適応を強調するあまり、かえって本質主義的適応理解に陥っていないか、という人類学批判にもなっているのである。

著者は言及していないが、本書の読者の多くは O. ルイスの『貧困の文化』を連想するのではないだろうか。5 家族をとりあげているところまで符号している。本書の事例を読めば、たしかにルイスの「貧困の文化」との共通性をいくつか見出すことは可能だろう（離婚の多さとか、スラムコミュニティのインフォーマルなネットワークとか）。しかし本書は「貧困の民族誌」であって「貧困の文化」の研究ではない。むしろサマの生活実態を「貧困の文化」といった包括的概念で説明することを拒否することで、動態的記述に成功したといえる。

安易な文化的説明を避けていることが本書の成功の一因だが、他方で文化的説明を求めたくなる部分もある。たとえば物乞いは、本書でも貧困、他の生業を選べないことによるやむを得ぬ選択として描かれているが、こうした条件の存在と物乞いの実行とのあいだには大きな飛躍があるはずである。同程度に貧

困であっても物乞いに踏み切るか否かには、個人的な決断をこえた要因が予想される。この点に関して拙論の引用に問題がある。「貧困層としてのバジャウのステレオタイプは（中略）先住民アエタのあいだでさえできあがっていた [玉置 2000: 127]」（p.41）としているが、アエタのもつステレオタイプは「物乞いとしてのバジャウ」であって単なる「貧困層」ではない。アエタは「自分たちはいかに貧困でも物乞いはしない」という言い方でバジャウと差異化する。物乞いが民族的差異の指標となっているのである。著者は将来の研究として、慈善行為や自尊心などのテーマを深めたいとしている（p.326）。まさにそれが「文化としての物乞い」を考える手がかりになるだろう。物乞いの戦略やジェンダーの問題を含めた「物乞いの民族誌」も期待したいところである。

評者には本書を開発経済学として専門的に評価する能力はないが、やはり本書の原型が開発経済学の博士論文であるということの意義は大きい。かつて人類学者ヒルが開発経済学批判として、途上国経済、社会内部のさまざまな多様性を無視した「誤った一般化」という総括を行なったが [Hill 1986]、本書のような研究を無視した開発経済学批判は、いまや「誤った一般化」のそしりを逃れないだろう。ただし、フィールドワークに基づく開発経済学の研究ということでは、著者の指導教官である中西徹がマニラのスラムで研究を行なったし [中西 1991]、中西の師・高橋彰は 1960 年代にすでに中部ルソン農村での調査に基づく先駆的研究を行なっている [高橋

1965]。本書では中西の研究が脚注的に言及されているだけで、詳しく論じられてはいない。「文献渉猟とそれに基づく論考が不徹底になってしまった」（p.325）というが、文献渉猟以前に大きな影響を与えたはずの師の研究にほとんど言及しないのは、本書で唯一解せない点である。しかし、中西の調査が「社会学的」であるのに対し本書は「人類学的」であるといえる。その対比は、たとえば対象住民の類型化に現れる。中西は所得という経済学的指標（エティック）によってスラム住民を分類しているが、本書では住民の主観評価というエミクの視点を採用している。そしてそのエミクの扱い方が、民族誌への方法論的貢献となっている。主観的評価の結果 13 人が個人よりカンボン毎の評価をした。著者はその場合のカンボンの最大数 5 をとって代表とされる各 1 世帯を訪問し、自分たちのグループに属するとみなす世帯を選んでもらう。それを 20 人の評価からの世帯の順位分布と照らして 5 グループとした（p.87）。主観調査から恣意性を排する姿勢は、やはり経済学者としての厳密性への拘りによるものだろう。一部の人の語りをそのまま集団全体のエミクとしてしまう人類学者も少なくないなか、著者の態度には学ぶべき点がある。

他方、本書が開発経済学に新しい理論的貢献をしたとはいいいくいだらう。また「分析結果からの含意」が貧困に関して従来看過されてきた側面を指摘し、援助政策への提言の含みももつものの、具体的政策提言が論じられているわけではない。それが開発経済学としては弱点といえるかも知れない。もちろん

それは著者も十分承知していることであるが、その一因が本書の視点が著者の意識以上に人類学的になっていることにもあるのではないかと思われる。著者は「人類学的研究であれば（中略）人びとが「在地の論理」に基づいてとる「主体的反応」にこだわり、地域の文脈に沿って微細な視点から世界を読み解こうとするだろう（中略）。だが本書では、むしろ「在地の論理」と「よそ者」（中略）との認識のずれや援助にともなう外部からの資源投入が、人びとの暮らしぶりをどのように変化させたのか、という点に課題を絞りたい」（p.290）として、人類学との差異を強調している。しかし著者の重視した課題も最近の人類学の重要課題といえる。長年イヌイットの研究をしてきた岸上伸啓は、都市イヌイットのコミュニティ形成運動に積極的に関与する中で「人類学とは何か」という疑問に突き当たり、「人類学的実践が、内部の視点と外部の視点とを併用しつつ微視的な視点からほかの人々の多様な生き方を長期の現地調査に基づいて理解し、記述することであることを強調しつつも、その実践そのものや調査結果の援用が現地の人々の生活を変化させる可能性があることを指摘した」[岸上2006: 520]。この岸上の人類学者としての自問は、本書の著者の開発経済学者としての悩みに通底するだろう。内と外の認識のずれを深く知ってしまった著者は、安易に理論化や政策提言ができない、あるいはすることを躊躇せざるを得ないのではないか。そうした悩み、ジレンマを突き抜けて理論化や提言が生まれたとき、著者の新しい開発経済学への貢

献がなされるだろう。

そもそも本書を人類学と経済学にわけて評価することは有益でない。本書が領域をこえて多くの読者に読まれることを願って筆をおきたい。

#### 引用文献

- 岸上伸啓. 2006. 「都市イヌイットのコミュニティ形成運動—人類学的実践の限界と可能性」『文化人類学』70 (4): 505-527.
- 高橋 彰. 1965. 『中部ルソンの米作農村：カトリナン村の社会経済構造』アジア経済研究所.
- 玉置泰明. 2000. 「都市先住民の生存戦略—フィリピン・ルソン島南部アエタ (Acta) の薬売り」『静岡県立大学国際関係学部紀要』13: 109-130.
- 中西 徹. 1991. 『スラムの経済学：フィリピンにおける都市インフォーマル部門』東京大学出版会.
- ルイス, オスカー. 2003. 『貧困の文化—メキシコの〈5つの家族〉』高山智博・染谷臣道・宮本勝訳, 筑摩書房.
- Hill, P. 1986. *Development Economy on Trial: The Anthropological Case for Prosecution*. Cambridge: Cambridge University Press.

Itaru Ohta and Yntiso D. Gebre eds.  
*Displacement Risks in Africa: Refugees, Resettlers, and Their Host Population*. Kyoto: Kyoto University Press and Melbourne: Trans Pacific Press, 2005, 394 p. + xv.

MAMO Hebo\*

*Displacement Risks in Africa* is an outcome

\* Graduate School of Asian and African Area Studies, Kyoto University